

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名

いやなが保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

「まてまて～」0歳児

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

0歳児には、はう・伝い歩きする姿が盛んにみられる。これらの身体活動を通じて、全身のバランス感覚や運動機能の発達を促すことをねらいとした。保育者は、動きを引き出す環境を用意し、子どもたちの探究活動を観察した。

2. 活動スケジュール

【4月】テーマ決定 問いの検討、環境デザインの検討

【5月】探究活動の実践/1回

・はう動きを促す環境1：カラーボール・円柱の音の鳴るおもちゃ・保育者がプルトイを引く

【6月】探究活動の実践/1回

・はう動きを促す環境2：カラーボール・円柱の音の鳴るおもちゃを積む・段差マット

【7月】探究活動の実践/2回

・乗り越える動きを促す環境1：円柱の音の鳴るおもちゃを積む・布団の山

・乗り越える動きを促す環境2：段差マット

【8月】探究活動の実践/1回

・乗り越える動きを促す環境3：布団の山・段差マット2種類・円柱の音の鳴るおもちゃ

【9月】途中経過のまとめ

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

【子どもの興味を引くおもちゃ】

・円柱の音の鳴るおもちゃ（手作り）

・カラーボール、引くと特徴的な動きをするプルトイ（ヴァルターアヒル・カラムカデ）

【安全に楽しく動きを探究するための設置物】

・畳の部屋

・段差マット（組替え式）

・布団の山（布団、ソフトベンチ、大きな布）

・風呂マット…「まてまて～」遊びに集中できるように、他の遊具の棚に立て、隠すために使用

・CDデッキ…楽しい雰囲気ですべるように小さい音量で音楽をかけた

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

動きを引き出す保育者の動き/子どもの主体的な動き

(探究活動で見られた子どもの「やってみよう36の動き」*1につながる動作番号)

「おいかけよう！」

・カラーボールや円柱の音が鳴るおもちゃを保育者が転がす/子どもがはって追いかける

・プルトイを保育者が引く/子どもがはって追いかける

・保育者が「まてまて～」と子どもを追いかける/子どもははって逃げる

(①はしる ⑦はう ⑨もつ ③ふる ⑤つかむ)

「こっちにこれるかな～？」

・円柱の音の鳴るおもちゃを積む/「倒したい」気持ちでおもちゃの方に行く

・段差マットや布団の山の上におもちゃを置く/「取りたい」気持ちで手を伸ばしてとる

(⑮のぼる ⑦はう ⑨もつ ⑤つかむ ③ふる ⑥たおす)

*1:「やってみよう36の動き」…東京都教育委員会が発行リーフレット「幼児期の運動遊び・運動習慣」より

https://www.taiiku-kenko-edu.metro.tokyo.lg.jp/life_style/doc/r7/youjiki-undou-r7.pdf

<活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

・カラーボールや音の鳴るおもちゃには、どの子も興味を示し、手に取って触ったり舐めたりする姿が見られた。音の鳴るおもちゃでは、自分で振って音を楽しむ様子もあった。保育者がおもちゃを転がすと、ハイハイで追いかけて、積み重ねたおもちゃを倒しに行ったりするなど、活発な動きが見られた。

・段差マットは段差ごとに触感が異なる。初めは新しい環境に戸惑い、近づこうとする子は少なかったが、繰り返し環境を設定することで次第に興味を示す姿が見られるようになった。手足を上手にを使って登ったり降りたりする姿もあり、降りる際には体を回転させてお尻から降りる子もいた。最初は挑戦しなかった子も、保育者が実際にやって見せたり、「すごいすごい！上手だね～」と声を掛けたりすることで、他の子も近づき始めた。登れるようになると、どの子もとても満足そうな表情を見せ、繰り返すうちに動きがスムーズになり、成長が感じられた。

・布団の山では、最初は環境に躊躇する子もいたが、興味を示した子はハイハイで登り、布団の感触を楽しんでいた。保育者が「まてまて～」と言いながら追いかけると、嬉しそうに逃げる姿も見られた。山を手足を使って一生懸命登る子、山のふちにつかまりながらバランスをとって立つ子など、それぞれが自分なりに遊びを楽しむ姿があった。



円柱の音の鳴るおもちゃを「たおせるかな？」



布団の山で「こっちにこれるかな？」



段差マット上のおもちゃを「取れるかな？」

5. 振り返り

<振り返りによって得た保育者の気づき>

・探究活動を重ねるごとに、「前はできなかったのに今回はできた！」という姿が多く見られ、それぞれの子どもの意欲や体の動きの成長の変化を強く感じた。

・活動時間が長いと飽きてしまうため、15～20分程度がちょうど良いと感じた。また、周囲に興味を引くものがあると活動に集中しにくくなるため、体を動かす遊びにしっかり集中できるような環境設定の大切さを改めて実感した。

・毎回同じおもちゃや設定を用いることで、子どもたちが環境に慣れ、後半には安心した表情で活動に参加する姿が見られた。同じおもちゃでも、成長段階によって遊び方が変化し、飽きることなく遊び続けられることも分かった。

・保育者が子どもと同じ気持ちになって一緒に動くことで、子どもの動きが活発になり、「できたね」「すごいね」といった声かけが子どもの「嬉しい」「またやってみたい」という気持ちにつながり、次の行動への意欲を引き出すことができた。

・0歳児は眠気や空腹など、その時々機嫌に左右されやすく、全員が機嫌よく参加できないこともあった。そのため、「安心して取り組める」ことを特に大切に、状況に応じて時間や日にちを変更するなど、柔軟な対応が必要であると感じた。

・子どもの動きを引き出すために、安全で意図的な環境を「やってみよう36の動き」と照らし合わせながら進めた。今後も楽しみながら、少しずつ動きの幅を広げていけるように工夫していきたい。